連載㊻ バンコクの日本人

バンコクの日本人、戦前の日本人会歴代会長

早稲田大学アジア太平洋研究科教授
村嶋 英治
(e-mail : murashim@waseda.jp)

本誌7月号に掲載した、「本会成立以来歴代会長」（1932年6月発行の暹羅国日本人会会報復活第1号、99頁）のリストにより、1913年の創立以来1932年までの暹羅国日本人会の歴代会長、12名が明らかになった。本号では、この12名に加え、1945年までの合計23名の会長の氏名（敬称略）、略歴、在職時期、その他の役員氏名などを一覧表にしてみた。

なお、確かな資料が存在する1920年代半ば以後の事例から見て、それ以前においても会長は年度初めの4月に選出され、その任期は1年であったはずであるが、1913年から25年までは会長就任年月日が判明する資料を欠いているため、この間の在職時期は推定した。また、会長の生年の次に出身地を記し、没年が判明する場合のみ没年を記した。卒業者の多い、東京高商とは東京高等商業学校（現一橋大学）、神戸高商とは神戸高等商業学校（現神戸大学）である。三井物産社員のタイでの在職期間は、職員録（三井文庫所蔵）に拠っている。役員名は判明する限り記載し、不明の場合は空欄となっている。

さて、何人かの日本人会会長のプロファイルを見てみよう。

初代日本人会会長小牧太次郎（1877-1931）

初代暹羅国日本人会会長は、医師の三谷足平であるという誤解が戦後に生じたが、日本人会の初代会長は、正しくは三井物産の小牧太次郎である。日本人会の前身は、三井物産と川崎造船の大口寄付で1906年に生まれた日本人倶楽部。日本人倶楽部の初代会長は、三井物産の檀野礼助、2代目会長はシャム政府の法律顧問政尾藤吉である。政尾は1913年8月末に帰国した。政尾藤吉の伝記として、筆者は、泰国日本人会百年史で、香川孝三著『政尾藤吉伝』（信山社出版、2002年）を賞賛したが、その後同書が引用している日英両語の資料をオリジナルと照合したところ、極めて杜撰な著作であることを知った。ここに賞賛の言を撤回しておく。

さて、筆者の推測が正しければ、帰国する政尾の後任会長選出を一因として、日本人倶楽部は1913年9月に日本人会に改編されたのである。日本人会初代会長には小牧が選出された。

小牧太次郎は、鹿児島県出身で1899年に東京高商の本科を卒業し三井物産合名会社に就職し、間もなくロンドン支店勤務となった（『東京高等商業学校一覧（従明治37年至明治38年）』（1904年12月20日発行、136頁）。当時の高商は、本科の上に2年間の専攻部あり、専攻部を卒業すれば商学士の学位を得ることができた。

葛生能久『東亜先覚志士記伝下巻』（黒龍会出版部、1936年発行、566-567頁）は小牧を、次のように志士の一人として取り上げている。

小牧太次郎（小野田セメント社員、鮮）、明治十年二月十七日鹿児島県薩摩郡平佐村白和に生れ、同三十二年東京高等商業学校［本科］を卒へ、直に三井物産会社に入り、孟買、倫敦、晩香坡、盤谷等の支店又は出張所に派遣されて手腕を揮ひ、大正四年本店勤務となつたが、翌年辞して小野田セメント会社に入り、同七年平壌支社の支配人となつた。この当時より内鮮融和に就て細心の注意を払ひ、単に同社工場内のみならず、進んで附近の鮮人部落の有力者に接近し、屢々会談して彼等部落民との融和に努め、勝湖里学校組合管理者として内地人子弟の教育に尽瘁する一方、鮮人子弟を収容する普通学校組合の設置に尽力し、此等子弟の就職斡旋の労を執る等融和事業の為めに大に貢献した。昭和三年新に仁川府外川内里に同社の支店が設置せらるるやそが支配人をも兼ね、将に内容充実して外に発展せんとする際偶々病に罹り、昭和六年五月二十八日別府に於て没した。年五十五。東

クルンテープ
2018年8月号
最終

~~598~~ 597

	歴代日本人会会長名、経歴等	会長在任時期（推定を含む）	日本人会役員名	会長在職日が判明する同時代資料
初代	小牧太次郎 1877年鹿児島～1931, 東京高商本科1899年卒, 三井物産盤谷出張員在職1911年9月18日～1915年7月23日			
2代	三谷足平 1860年弘前～1924年7月3日, 1881年医術開業試験に合格し三等軍医に, 1894年から在タイ, 「日本医院」経営	推定1914(又は15)年4月～1916年4月		
3代	新家 亮 1883年, 三井物産盤谷出張員在職1915年7月23日～1917年2月12日	推定 1916 年 4 月～1917 年 2 月		
4代	加藤尚三 1887年名古屋, 市立名古屋商業学校1903年卒, 三井物産盤谷出張員在職1917年2月12日～1919年10月1日	推定 1917 年 2 月～1918(又は 19 年)4 月		
5代	土居 節 大阪生, 東京高商中退, 1900年2月三井物産支那修業生, 1910年三井物産退職, 大澤商会バンコク主任	推定1918(又は1919)年4月～1919年中途		1919 年 4 月 24 日 (『郁子の葉蔭：林傳君遺文集』, 1925 年 , 209 頁)
6代	水野泰四郎 1878年福島, 台湾協会学校[現拓殖大]1903年卒, 台湾銀行盤谷出張所（1919年3月5日新設）	推定 1919 年中途～1921 年 4 月	山本雅一, 山口萬吉, 木下 亨, 神谷信男, B.Miyagi, 梶沼三之助, 大槻二雄大谷清一, 江尻武司, 宮川岩二 (The Siam Directory 1921)	1920 年 6 月 19 日 (タイ国立公文書館 ภพ. 6. 5/20)
7代	平佐 幹 1890年山口, 神戸高商1914年卒, 台湾銀行盤谷出張所（のち野村銀行に転職）	推定 1921 年 4 月～1923 年 4 月		1921年8月3日(南洋日日新聞1921年8月10日号) 1922年1月3日(Bangkok Times 3 Jan.1922) 1922年11月13日(『遠藤之事情』)
8代	山本雅一 1888年兵庫, 神戸高商1912年卒[?], 三井物産盤谷出張員首席在職1919年10月1日～1924年6月14日(のち山本商会設立)	推定 1923 年 4 月～1924 年 4 月		
9代	江畑弥吉 1887年滋賀～1952, 江畑洋行	推定 1924 年 4 月～1925 年 4 月	塩田 厚, 柴野宗拔, 大谷清一, 三木 栄, 波多野章三, 吉岡幸造, 永塚喜三郎, 遠藤 清, S.Izumi, 竹内佐十郎 (The Siam Directory 1925)	
10代	植木房太郎 1888年東京～1941, 東京高商本科1911年卒, 三井物産盤谷出張員首席・同出張所長在職1924年6月14日～1932年8月4日	推定 1925 年 4 月～1929 年 4 月	江尻武司, 吉岡幸造, 大谷清一, 宮川岩二, 山口萬吉, 河井為海, 加藤府人, 遠藤 清 (Bangkok Times, 1 March 1926)	1926 年 2 月 27 日 国王即位日本人会祝賀
11代	河井為海 1895年茨城, 東北大学医学専門部1917年卒, 1922年12月6日より盤谷府日本医院医師, 1933年2月まで在タイ, のち台湾で開業	1929 年 4 月～1932 年 4 月 13 日		
12代	大谷清一 1884年米子～1969, 大谷洋行（1911年6月～1934年8月在タイ）	1932 年 4 月 13 日～34 年 4 月 15 日	幹事：日高秋雄, 田中薗四, 有延喜一, 江尻武司, 宮川岩二, 鈴木宇治, 植木房太郎(後任新野芳四郎), 金沢貞三, 塩田 厚, 宮川久治(会報1号76,84頁) 1933年4月15日幹事:田中(後任磯部紘蔵), 有延, 鈴木, 宮川岩二, 藤井又一, 新野, 日高, 橋元秀, 宮川久治, 前田 浄 1933年8月26日会則変更により理事7名選出, 宮川岩二(後任前田), 鈴木, 有延, 日高, 藤井, 新野, 磯部(会報4号61頁)	会報 1 号 76 頁 会報 5 号 89 頁
13代	小川蔵太 1895年名古屋～1978, 愛知医専[現名大医学部]1919年卒, 医師(1956年からウィエンチャンで博愛病院長)	1934 年 4 月 15 日～1936 年 4 月 11 日	理事：磯部, 日高, 鈴木, 秋山芳太郎, 新野, 有延, 松尾忠彦(会報 5 号 90 頁)	会報 5 号 89 頁 会報 8 号 81 頁
14代	鈴木宇治 1897年徳島～1979, Borneo Co. 燐寸工場（シャムマッチ）副工場長, 在タイ1930～1937年8月	1936 年 4 月 11 日～1937 年 4 月 18 日	副会長：日高秋雄 理事：磯部, 新田義實, 大谷長三, 新野, 岡崎竹次郎, 三木 栄, 宇田川定雄, 太田吉一, 武居芳郎(会報8号81頁)	会報 8 号 81 頁 会報 8 号 95 頁
15代	三原新三 1886年東京, 東大農科1910年卒, シャム農業省棉花専門家（1935年10月から3年間）	1937 年 4 月 18 日～1938 年 4 月 5 日	理事長 新田義實 理事：三木, 新野, 林原竹夫, 岡崎, 太田(会報 9 号 36 頁) 青木真(同 48 頁)武居, 大谷(同 32 頁)細井久四郎(同 56 頁)	会報 9 号 36 頁 会報 10 号 162 頁
16代	難波勝二 1891年東京, 京大法1915年卒, 1937年3月～1938年12月横浜正金銀行出張所長（戦後は東洋大学教授）	1938 年 4 月 5 日～5 月 2 日	理事長：日高秋雄 理事：細井, 中西久次郎, 大西徳信, 松尾, 大谷(後任古谷重次)(会報 10 号 162-163,166 頁)	会報 10 号 162, 165 頁
17代	三木 栄 1884年前橋～1966, 東京美術学校漆工科1910年卒, シャム文部省Fine Arts School教師	1938 年 5 月 2 日～1939 年 4 月 5 日	同上	会報 10 号 165 頁
18代	高月喜右衛門 1886年三重生, 大阪高工[現阪大工学部]舶用機械科1908年卒, 三井物産支店長	1939 年 4 月 5 日～6 月 26 日	理事長：日高秋雄 理事：久保三蔵, 中西, 陳大機, 春山速水, 松尾(会報 11 号 150 頁)	会報 11 号 150, 151 頁
19代	竹田真昌 1893年三重生, 東大法1920年卒, 大阪商船駐在員事務所長（1935年10月来タイ）	1939 年 6 月 26 日～8 月 26 日		会報 11 号 151, 152 頁
20代	日高秋雄 1905年徳島～1979, 徳島商業学校卒, 1928年来タイ, 日高洋行	1939 年 8 月 26 日～1940 年 4 月 11 日	理事長：松尾忠彦 理事：渡邊幸平, 土屋, 武居, 陳大機, 川邊真澄(会報 11 号 152 頁)	会報 11 号 152, 154 頁
21代	谷 清訓 1894年三重, 東京高商1919年卒, 三菱商事支店長（戦後三菱商事常務）	1940 年 4 月 11 日～1941 年 4 月	理事長：大谷長三 理事：武居, 陳大機, 渡邊, 春山(後任真野吉之助), 松尾(会報 11 号 155 頁)	会報 11 号 154 頁
22代	江尻賢美 1880年富山～1965, 1906年三谷医院事務員として来タイ, 医師	1941 年 4 月～1943 年 4 月 9 日	理事長：大谷長三 理事:保田英一, 池尻正二, 鬼頭嘉吉(1942年7月20日現在)	泰国日本人会百年史 34 頁, 新田義實(泰国商工会議所会頭)日記 1942 年 4 月 8 日
23代	森 廣三郎 1893年京都～1973, 神戸高商1917年卒, 三井物産支店長（戦後東洋レーヨン社長）	1943 年 4 月 9 日～1945 年	理事長：大谷長三(44年4月からは保田英一が理事長)(泰国日本人会百年史 34 頁)	泰国日本人会百年史 34 頁, 新田義實日記 1943 年 4 月 9 日

京多摩墓地に葬った。（遺族、東京市中野区道玄町八、小牧ヨネ）

小牧は、1916年小野田セメントに入り、1917年に同社平壌支社が開設されるや初代支配人となり、1931年に病死するまで平壌に勤務した。彼は、社会事業にも熱心であった。

小牧は殖民地朝鮮におけるセメント生産の最初から関わり、10数年間で朝鮮におけるセメントの自給を達成するという功績を挙げた。小牧は、1927年に平壌支社支配人のまま、小野田セメントの取締役に就任している。支社工場支配人が役員に名を連ねた最初の事例である（財団法人日本経営史研究所編『小野田セメント百年史』、1981年、322頁）。

1930年7月に発行された工政会『工政』第127号、7～9頁に、小野田セメント製造株式会社取締役の肩書きで小牧は、「朝鮮におけるセメント、需給と事業の現状及将来」と題した小論を載せ、その中で、次のように書いている。朝鮮におけるセメント需要は従来極めて限られており輸入に頼っていたが、殖民地化後1916～7年頃より、官私鉄道建設、水力電気事業、道路橋梁、水利等の諸インフラ建設が活発化し、セメントの需要が急増した。これを受けて、小野田セメントは朝鮮におけるセメント生産の開祖として1917年5月に平壌支社工場の建設に着手し、1919年末に稼働させた。平壌支社工場は朝鮮全域にセメントを供給するには地理的に偏った立地であったので、全域に便利に供給可能なように1928年末に川内支社工場を完成させ朝鮮におけるセメントの自給自足を実現した、と。小牧曰く、今や全鮮の需要に対して供給の準備は全く成れるが如き状態にあるのである。僅々十年余り以前に於ては、其総需要を鮮外産品に仰がねばならなかつた半島のセメント界は、今や全く自給自足の境域に達し得たのみならず、尚進んで母国其他海外に対して其余剰を供給せんとする迄に進んで来たという事は、吾人の私かに快とする所である、と。更に、彼は民生向上の観点から、冬の寒さが強烈な朝鮮で、安価なセメントを供給し防寒住宅の建設を進めるべきことを述べている。

第2代目会長三谷足平については、本誌に随分書いて来た。幾らか追加すれば、三谷は「日本医院」（Nippon Iin）を経営したが、この医院に事務員として1906年に就職した江尻武司（賢美）は、いつの間にかタイの医師となり、第22代日本人会会長ともなった。本誌6月号で江尻ファミリーを紹介しているが、江尻は1935年頃女医の神谷りう（1895－1980）と再婚した。神谷りうは、現在の豊川市（愛知県）の農家の三女に生まれ、小学校の裁縫の専科正教員の免状を持っていたが、20才の夏結婚問題がもち上がりましたが、いっそ結婚にかかる費用1,000円ぐらいを学資に代えて勉強し、何らかの技術を身につけたい、また東京へも行きたいと思い（江尻りう「あの頃のこと」、『日本医師会雑誌』第65巻1号、1971年1月、88頁）、上京し、独学で専検に合格されて東京の高女四年生に編入、卒業後東京女子医専（現東京女子医科大学）（産婦人科）に進学された。同校卒業後さらに東京帝大医局に勤めて研究を積まれた。大正十二年母校東京女子医専「吉岡弥生校長」の推薦により、シャム国の首都バンコクに派遣され、三―四年にわたる御活躍後に帰国されて東京橋にて開業なされた。そして昭和八年再びタイに行かれ（笹野正雄編『徹底推譲の報徳人　江尻りう女史』、社団法人愛知報徳会、1982年、14－15頁）た、という女傑である。戦後、江尻りうは、故郷の豊川に夫の賢美を連れて引き揚げ開業した。彼女は、報徳会に参加し、質素な生活をしながら蓄えた多額の金銭を惜しげも無く公益事業に寄付した。1980年6月に、84歳で植林ボランティアとして来タイし、帰国後体調を崩して死亡した（愛知新聞1982年9月23日）。

三谷の日本医院に1922年末から勤務し、1924年7月の三谷死亡後、日本医院を継いだ河井為海は、第11代目の日本人会会長である。河井時代の日本医院の広告には、Dr. T. KAWAI, M.D とともに、Veterinary Surgeon（獣医）H. Mitani（三谷日生）の名も載せられている。三谷日生（1896－1971）は、二男一女をもうけた三谷足平・ヨネ夫妻の長男で、1922年に東京獣医学校を卒業した。日生は、1926年6月の盤谷日本尋常小学校の開校時に暹羅語専科嘱託をしたり、1930年代には日本武官室の通訳をしたりした。

彼は戦後タイ残留が許可された数少ない日本人である。足平の二男、勲（いさお）は早世したので、足平・ヨネの血筋で今日まで続いているのは、長女文江（東洋英和卒、関三郎と結婚）の子孫のみである。文江の長女である作間澄子（昭和3年生）さんを、筆者は本年3月28日に訪ねたが、彼女の話では、都立多磨霊園にあった足平・ヨネの墓は、管理費滞納のために、撤去されてしまったという。

第3代、第4代目会長の新家亮、加藤尚三は、ともに三井物産社員であるが、経歴は殆ど判らない。個人情報保護がうるさく言われるようになる以前に、三井物産の人事部門に、元社員の何人かの経歴を問い合わせたところ、丁寧に教えて頂いた経験があるが、今日では無理であろう。是非、会員である三井物産の方に調べて欲しいものである。

第5代目会長　土居節

第5代目の土居節は、三井物産から京都の大沢商会に転じた人である。

京都で侠客の子に生まれ、ゼロから出発して電気事業、時計製造、貿易商社などで大をなした明治大正期の実業家で京都財界の重鎮であった大沢善助（1854-1934）が創立した大沢商会は、バンコクに、1915年7月から1920年11月まで5年余支店を置いたことがある（大沢善助『回顧七十五年』1929年、及び大沢商会社史編纂委員会編『創業100年史：大沢商会』1990年、275頁）。土居節は東京高商在学中の1900年2月に三井物産支那修業生（1899年1月に創設、この支那修業生には、森恪、高木陸郎などもいる）に採用され、広東に派遣され、言語、商取引の慣習などを3年の年限で学んだのち、三井物産広東出張所に勤務した。

1907年6月に東京高商本科2年在学中の守田藤之助（1886-1969）は、中国を旅行し、広州沙面で三井物産出張所長の先輩土居節を訪ねた。「土居氏は明治35年の高商出身で特に支那問題に没頭せられ、支那婦人を正夫人として」（守田藤之助「中国三代に生きる、第一篇清朝時代（一）」、『東亜時論』1966年10月号、46頁）いた。守田がこの回想記を書くに際し、旧三井物産会社別室、如水会、滬友会などの協力を得て調べた土居節の経歴は、「大阪府人、明治35年東高商中途退学、三井物産入社、43年3月上海支店勤務中退社、大正14年頃広東沙面英租界広東実業公司自営」（同上論文、48頁）というものであった。しかし、守田の調査では、土居の大沢商会時代の経歴が落ちている。在バンコク領事の本省への報告によれば、土居節は、1917年12月末も、翌18年12月末も大沢商会のバンコク支店主任である。同バンコク支店の1918年の取引売買額は185万バーツ、従業員は日本人6、現地人4である。一方、加藤尚三下のバンコク三井物産の取引売買額は903万8千バーツ、従業員は日本人7、現地人23であった（外務省記録 3.3.7/25「農工商漁業等に従事する在外本邦人の営業状態取調一件」）。

1919年4月24日にワット・サケートで営まれた、医師林傳（はやし・つたえ、ボルネオ会社のシーラーチャー材木会社附属病院勤務、慈恵医専の同窓である磯部美知の紹介で、1917年2月に来タイ、腸チフスで死亡、満32歳）の葬儀に、土居節は日本人会会長として参列した（『椰子の葉蔭：林傳君遺文集』、1925年、209頁）。しかし、その直後1919年6月には大沢商会を辞し、新しい就職口を求めて広東に向かった。広東では、旧知の渋谷剛の斡旋で、中華新報（社長容伯廷、日本の広東総領事が新聞操縦の対象として資金援助中）から100元、渋谷剛から100元、毎月合計200元の報酬を得ている（外務省記録 1.3.1/1-39「新聞雑誌操縦関係雑纂」）。土居は、1944年当時は60歳代後半になっていたと思われるが、広東の日本人社会で「老広東」として知られ、広東の生き字引的存在として、広東総領事が日本人訪問客（1944年5月の作家大鹿卓など）を迎えた際の食事会などに招待されている（大鹿卓『梅花一両枝』、洗心書林、1948年、75頁）。

第6代の水野泰四郎、第7代の平佐幹は、1919年3月5日にバンコクに開設された台湾銀行出張所員である。

水野泰四郎（福島出身）は東

京茗荷谷に1900年に創立された台湾協会学校（拓殖大学の前身）に1期生として入学し、1903年7月11日の第1回卒業式で卒業した45人中の一人である（「台湾協会学校第一回卒業式」、『台湾協会会報』第58号、1903年7月20日、47頁）。水野は台湾銀行に就職し、バンコクに赴任する前の1918年は、汕頭勤務で、汕頭日本人協会（1915年より同地日本人学校及び台湾籍民子弟向けの汕頭東瀛学校（台湾総督府が援助）を経営）の会長を務めていた（外務省記録 3.10.2/10-26「在外本邦学校関係雑件　汕頭東瀛学校　附汕頭日本学校」）。1955年の『人事興信録　第18版（下）』によれば、水野は「日興電機（株）社長、日興電光（株）取締役、日本通信機器協同組合理事長、有線通信工業会理事」である。

第9代目会長　江畑弥吉

日本に本社がある大手企業の社員（医師の三谷を除く）が歴代会長を占めてきた中にあって、第9代目の江畑弥吉は異色の人である。江畑は滋賀県犬上郡磯田村大字八坂（はっさか）［現彦根市八坂］の出身で、満16才の1904年2月16日に、清国安南暹羅を、商業見習の目的で旅行するために大阪府で旅券の下付を受けた。

視察後、一旦帰国し、1906年に弟の江畑弥惣吉とともに再度来タイし、「初め雑貨商を営みしが翻然志を改め今は農業にて成功しつつあり」（東京朝日新聞1909年7月23日）と報道されているように、1907年6月にランシットの国鉄の駅近く（当時はタンヤブリー県）に農地を借りて米作を開始した（タイ国立公文書館 5.ก.ร.ต. 1.1/4, p. 709）。1910年には、タンヤブリー知事は、江畑が日本から持ち込んだ犂を使用して田を鋤いていることを国王に報告した。国王が日本製犂とタイの犂の性能を比較させたところ、日本の犂は、タイの犂では鋤けない固い土を鋤くことができ、かつ深鋤、浅鋤の調節も便利にでき、鋤く土量も多く、田植をせず直蒔きのランシット辺りの耕地に適していることが判った（同 5.ก.ร.ต.）。本誌2017年5月号に引用したように、1912年当時江畑は、2000ライの水田を100人の労働者を雇用して耕作している。

来タイ直後の青年が、大規模な農業経営を行うには、日本国内に資金的基盤が必要である。江畑の家は、所謂近江商人で、大阪に何軒か質屋を有していた。江畑弥吉の兄である寅吉の孫、江畑弥八郎氏（前滋賀県会議員、寅次郎の子）に本年4月14日に電話してうかがったところでは、寅吉、弥吉兄弟の母である「ちの」は経営手腕があり大阪で事業を展開したという。

弥吉のタイにおける事業は、母「ちの」が海外にまで事業を拡大しようとして二男の弥吉を送り出したことに始まると思われる。弥吉は母の期待に背かず、着実に事業を拡大させた。バンコクでも「プローム」、「ミカサ」という写真館を開き、更に写真機や写真材料の輸入販売も開始した。

プロームは弥吉のタイ人妻の名であり、彼女との間に朔弥（スリヤ）が1911年に誕生した。江畑家にとって運悪いことに、弥吉の兄の寅吉が、息子寅次郎（1915年生）をもうけて間もなく死亡した。弥吉が1918年12月に旅券取得のために書いた申請書の続柄欄は、従来の「寅吉弟」から「寅次郎叔父」に変わっている。未亡人となった兄寅吉の妻（寅次郎の母）は、弥吉と再婚させられた。新しい父（弥吉）の住居に、母とともに移った時、寅次郎は5歳であった。その時の悲しさは寅次郎の心に深い傷を残したようで、彼は東京商科大学（現一橋大学）学生時代に親友になった小宮山量平に幾度となくその時の思いを吐露している。小宮山の自伝的大河小説『千曲川』には、寅次郎とその叔父で義理の父である弥吉のことが、随所に描かれている。

1939年時の江畑洋行（Y. Ebata & Co.）の本店はシンガポール、支店をバンコク、ペナン、シンガポールに有した。バンコク支店（本田寛次郎支店長）は、営業科目を、「（輸出）チーク其他堅木、（輸入）セルロイド製品、化学製品、菓子、刃物類、電気器具、硝子製品、蓄音機、鉄器、帽子、メリヤス、皮革製品、写真材料、陶磁器、食料品、ゴム製品、運動具、文房具、一般雑貨、化粧品及石鹸、手拭、玩具」（南洋経済研究所『南洋関係会社要覧（昭和14年版）』、43頁）と、同研究所の問合せに対して回答している。

戦後弥吉と息子の朔弥は、タ

601

イに戻ることを希望したが、タイ政府は許可しなかった。その背景が判る資料として、ウェブ上に拙稿『堀井龍司憲兵中佐手記：タイ国駐屯憲兵隊勤務（1942～45年）の想い出』（早稲田大学リポジトリ）があるので、ご関心のある方は読んで頂きたい。

大谷清一・大谷長三父子

戦前日本人会の役員を親子二代に亘って務めたケースは、大谷清一・大谷長三（1901－1997）のみである。清一は、12代目会長、婿養子の長三は、1940年4月から4年間4代目理事長を務めた。

大谷清一が郷里の米子で事業に失敗して、同郷の大山の誘いでバンコクに渡航したのは1911年、満27歳の時である。清一は大山商店に就職した（清一の孫の大谷一之氏提供の資料に拠る）。この時期の大山商店は、宮川岩二（本誌2010年8月号等参照）と清一を中心に経営された。清一は、1926年に独立して大谷洋行（Otani & Co.）を創立した。清一の仕事振りは、「唐木の輸出については独特の知識と経験を有し、営業振りが堅実なるを以て当国の唐木、本邦向け輸出は黄楊を除いては全然独占の観がある。仕向地は大阪六十％、東京四十％である」（『南洋時代第八号、今日の暹羅特輯号』、1930年10月10日発行、16頁）と評されている。

1934年7月に清一夫妻はタイを引き揚げ、長三が来タイして跡を継いだ。長三は旧姓鳥居、1918年に京都市立商業実修学校専修科を首席で卒業し、大阪の貿易商川原商店に就職。直ちにシンガポール支店に派遣され4年間勤務した。1928年には出光商店に移り、唐木輸入の調査のためシャムに出張した。多分、この機会に清一と面識ができたのであろう。32年に清一のむすめ香津子と結婚した。

長三は順調に大谷洋行を発展させた。コメ、ゴム、スティックラック、チーク、棉花、生ゴム、皮革その他をタイから輸出し、同時に神戸のキャンバスシューズメーカーの秋毎（あきまい）やライオン歯磨の総代理店も営んだ（Commercial Directory for Thailand B.E. 2484 の大谷洋行の広告）。

開戦前には多数の日本貿易業者がバンコクに進出したが、その中にあって大谷洋行は主要な一角を占めていたことは、次の評価からも判明する。

泰国に於ける日本人貿易業者は約五十社に上るも主なる商社は三井物産、三菱商事、三興、東洋棉花、大同貿易、江商株式、安宅商会、大谷洋行、大倉商事、野村商店、大南公司、又一株式、田村駒等である（南方開発金庫調査部『戦前に於ける南方各地邦人企業概観（泰国）』1942年10月、24頁）。

戦後の長三は、神戸の弘栄貿易に就職し、仕事上タイとの関係はなかった。

以上に紹介した日本人会会長以外についても経歴を調べたが、紙幅が尽きたので割愛する外ない。なお、泰国日本人会百年史は、誤って戦後の三井物産社長新関八洲太郎（にいぜき・やすたろう、1897－1978）が、1943～44年の会長であったと記しているが、新関は1942年9月17日にバタビヤ支店長に転じている（新関暢一編『いたらぬ過去を顧みて：新関八洲太郎回想録』2000年、中央公論事業出版）ので会長就任は不可能である。この時期の会長は新関の後任の森廣三郎である。

敗戦により在タイ日本人は、自由タイ政権により私財を含む全財産を接収された上、収容所に抑留され、日本に強制送還された。これによって、明治以来のバンコクの日本人社会は壊滅した。（終）

…………………………

※連載「バンコクの日本人」は第96回の本稿をもちまして終了となります。長い間、ご愛読いただきましてありがとうございました。

※本連載の著者・村嶋英治氏（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）の講演会「戦前のタイ国日本人会の史実に迫る」が8月31日(金)10時～11時半、日本人会本館で開催されます。ふるってご参加ください。詳細は32頁をご覧ください。

602 終